

船井情報科学振興財団 2014 年度 留学生レポート

2014 年 11 月
金石大佑

2014 年 8 月より、米国カルフォルニア大学バークレー校の機械工学科で制御工学について学んでいる金石大佑と申します。今回の報告書では、留学生レポートとして、サマースクールと米国の大学院での生活について述べたいと思います。

サマースクールについて

今回、大学院の専門の授業が始まる前にサマースクールに参加することにしました。その目的は、

- ①秋学期が始まるまでの生活環境を整える（家探し、現地のお店の確認等々）
- ②英語に少しでも慣れる

の2点でした。そこで、留学先の先輩方からの意見を伺いつつ、現在通っている大学の **English as a Second Language (ESL) Class** を履修することに致しました。特に、過去にドイツ語を勉強したときの経験から他国に住む際には **Speaking** が最重要であると考え、**Speaking** のクラスを2つ履修することにしました。また、2つある目的の内、②の観点で考えれば、授業を3つ履修することも可能だったかと思います。ただ、家探しに苦労したため、①を踏まえると、履修した授業は2つでちょうど良かったと思います。

ークラスメイトー

参加して、まず驚いたのは、アジア人、特に中国からの学生の多さでした。ミュンヘンでドイツ語を習っていた際は、南米人の多さに驚いた覚えがあります。しかし、今回はその驚きを上回るほどの割合で、2つ履修した授業のいずれも、

- ・日本人 数名（自分と他 1~2 人）
- ・韓国人 数名
- ・欧州人 1 名
- ・中国人 その他多数（15 名程度）

という数字でした。ですので、クラスメイトと仲良くして英語を伸ばす、ということは、ESL でのサマースクールでは期待しないほうが良いかと思います。ただ、ほとんどの学生

が学部2、3年生でありながら、自分の学部時代と比較すると、英語を話せる学生が多かったのは印象的でした。

—授業内容—

日本で学んできた英文法とは異なり、米国人が使うスラングや米国での授業におけるディスカッションの進め方等、実用的な事を英語で学びました。また、米国人のベテランの先生が行うので、ネイティブの英語を聞くことができます。ただ、マンツーマンではないため、発言の文法ミスをその都度修正してくれる、ということではなく、「とにかく話して英語に慣れる」ということが重要になるかと思います。また、発言点が成績の大きな割合を占めることから、話すことが求められているのだと思います。

たった3週間の超短期間の授業で、英語の語学力の向上、という点ではあまり進歩はなかったように思えますが、目的②の「英語に慣れる」という点では、日常的な英語を学ぶことができ、実りのあるものになったと思います。

大学院の生活について

—授業及び研究—

サマースクールの後、秋学期が始まり、専門の授業を履修し始めました。こちらの授業が大変だとは予め書籍等で情報を仕入れており、また、一般的に1学期に3科目が限度で3科目取ると研究をあまり進めることができないと研究室の先輩方から伺ったため、

①早めに必要単位数を確保するため、1年目の間に多くの授業（3科目）を取る

②研究に、より多くの時間を割くため、授業数を減らす（2科目取る）

という2通りの選択肢を考えていました。②の利点として、研究を進め、研究に必要なであろう授業を選択することができるかと思います。その一方で、②にして、授業を取ろうとしようとする、研究が忙しくなってきたころに、授業を取る必要に迫られる可能性があったため、①3科目の授業を履修することに決めました。

こちらの大学院の授業内容は課題の量が多く、1科目にかなりの勉強時間を要するのですが、授業自体は非常にわかりやすく、さまざまな知識が身についている実感もあります。一方で、秋学期の中盤から、非常に幸いなことに、希望していた研究プロジェクトに関わることができたのですが、3科目の授業の勉強に時間を取られ、研究をあまり進められていない現在の状況に少し焦っていたりもします。早く授業等でインプットしたものを、研究成果としてアウトプットできるようがんばりたいと思います。

－周りの学生と自分－

学期の初めは、周りの学生の優秀さに自分がついていけるのか不安に思っていたのですが、皆よく勉強していて、相応の努力をしているからこと優秀なのだという事実を改めて目の当たりにしました。そこで、他の学生に負けまいと、まずは「質」より「量」と思い、出来る限り空き時間を勉強に費やすようにしていたのですが、あまり差が埋まっていないように思えました。おそらく、周りの学生は、非常に要領よく勉強を行えているのに対し、自分はあまり要領が得られていなかったのかと思います。日本では、「日本語」の授業で、しかも友人とわからない箇所を相談でき、毎回の授業に関して疑問点をあまり残すことがなかった覚えがあります。その一方、こちらの授業では、他の授業の中間テストや宿題に追われていたり、相談できる友人が未だ少なかったりと、後手に回ることが多かったように思えます。そのため、「授業で理解する」という基本が自分で認識している程できていなかったのだと気付きました。今後は、周りの学生ともっと議論をする等、勉強の「質」の面も考慮しつつ、こちらでの学業に取り組んでいきたいと思えます。

最後になりますが、奨学生として採用くださった船井情報科学振興財団の皆様に、感謝申し上げます。ご支援があるからこそ、学業に打ち込めているのだと、渡米後改めて実感している次第です。今後も学業と研究に目一杯励みたいと思えます。